

## 〈第14回学会大会報告・講演〉

### これからのレクリエーション研究について

江 橋 慎四郎\*

ただ今御紹介に頂きました江橋でございます。今回は、本当に遠路わざわざ鹿屋まで御越し下さりまして厚く御礼申し上げます。

御覧のように、大学の施設・設備は完成途上でございまして、ようやく三分の一程度までできたわけで、工事も今が真盛りで、明年4月になるともう少し形が整えられると思います。そういう意味からすれば、大変準備不足のところをこういう全国的な学会大会というものを開催させて頂いたわけでございますので、御参会の皆さまには御迷惑なことと存じますが、私ども関係者としては、大変名誉なことではないかと思っております。

さて、演題は「これからのレクリエーション研究について」という題ですけれども、これからのレクリエーション研究というのは皆様方にやって頂くわけございまして、むしろ、こんなことも考えられるのではないかということで、時間の許す限りお話をさせて頂きたいと思っております。

実は今、学会の先生方の中でレクリエーション研究に関してのひとつのあるまとまった文献を出していただくのではないかとということで、いろいろと枠組を作ってお下さっております。その委員会では次のような枠組を作っておられます。第1番目が「歴史と原論」、第2番目が「意識と行動」、3番目が「サービス」、4番目が「レクリエーション指導・方法」、5番目に「環境」、6番目に「政策と施策」というような分類項目と申しますか、ひとつの枠組を作ってお下さっているわけです。これは、今までいろいろ研究発表が為され、それに基づいてこういった枠組を考えてはどうかということでひとつの考え方として提案され、それに基づいてこれからいろいろとまとめられていく予定で

ありますが、これはこれでひとつの考え方だと思えます。

レクリエーション研究というのは大変新しい分野であって、まだこれからいくらでも新しい研究の蓄積が為されていくわけですから、私自身としては、あまりこういうものをひとつの固定的な枠組みと考えるのはいかがであろうかと思っております。

私は、大学では教育学を専攻しておりましたが、教育学の体系については今だに記憶がございます。その教育学の体系には次のような分け方がありました。そこには「教育の目的論」、「対象論」、その対象に対してどういう内容を教えるのかということで「学習内容論」、その内容を対象にに応じてどういうふうにかリキュラム編成をし、指導してゆくのかということで「教育編成論」、「方法論」、そして「経営管理論」といった分け方がありました。その後、さらに分化して経営管理の中から測定評価の問題がひとつの領域として取り出されたり、あるいは『教育財政論』といった本も出てきてそういうものもひとつの新しい領域になって参りました。この他にも社会教育とか社会体育という領域が発展していくにつれて、「指導者論」であるとか、あるいは「施設論」、「組織論」、「教育計画論」といった領域にまで発展してきております。こういった枠組みが、レクリエーション研究にもなお当てはまり得るのではないかと考えられます。

それと同時に、やはりもう一方で『既成の』と申しますか、レクリエーション研究と比較すればひとつの学問領域としてきちんと体系化された歴史のある学問研究の領域がありますが、そういった領域からレクリエーションだけに限定しないで、レジャー・レクリエーションというものを研究していく方法もあります。

\* 日本レクリエーション学会会長・鹿屋体育大学学長 (President of Japanese Society of Leisure and Recreation Studies, and National Institute of Fitness and Sports)

そこには、哲学的・歴史的な研究法とか心理的な研究法などがあります。また、レクリエーションは身体の問題にも関連があるわけで、生理学的な研究法であるとか、教育学的な研究法もあります。さらには施設や環境のことを問題にすれば、造園学とか工学とかの研究法もあります。また、経営学、あるいは財政学というような歴史のある学問領域の研究方法を生かしながら、人の余暇行動やレクリエーション活動について研究をしていくという枠組みもあります。レクリエーション研究は、こういった様々な領域からのアプローチを取り得るわけです。

私自身、従来の教育学研究の領域区分を横軸にとり、今申しました諸学からの研究アプローチを縦軸にとって、その二つの枠組みの結び合わせで、これからの余暇・レクリエーション研究が位置づけられていくことも可能ではないかと思っております。そうしろと言っているわけではなく、まあ、そういう考え方もあると思っております。

それと同時に、この余暇とかレクリエーションの研究というものは日本だけでやっているわけではなく、やはり広く諸外国のこういった体系化の試みとか研究領域区分についてもマナコを広くして眺めていく必要があるのではないかと思います。

ひとつの御参考ですが、日本よりもレクリエーション研究の歴史が長く、かつ研究実績を持っているアメリカの例を紹介させていただきます。アメリカでは「レクリエーション学会」といった名称ではなく、略して「SPRE (Society of Park and Recreation Educators)」(スプレー)と言っております。「スプレー」といえば、例のグッと押せば霧の出る「スプレー」もあります。これはひとつのおもしろい考え方ではないかと思っておりますが、レクリエーションの発展を考えるならば、すべての方々にレクリエーションという霧をかぶって頂くという意味も一方にあるのではないかと思っております。要するに、公園とレクリエーションの領域とが一体化されているわけです。アメリカにも公園・レクリエーション教育を担当している専門家の集まりがあり、その専門家の集団が、毎年、研究発表を行なっています。

その学会では、第1番目の研究発表の枠組みとして研究方法論と、統計を含めた研究領域があります。第2が、余暇・レクリエーション行動における哲学的、歴史的、文化的、経済的側面というものをひとつの枠

にくくっています。第3が、日本では施設とか環境と言っておりますが、そういうものを全部含めて資源計画とその管理という領域があります。第4が、余暇行動における社会的側面についての領域です。第5が、特別な対象、たとえば高齢者や障害者に対してのレクリエーションサービスやカウンセリングという領域があります。このカウンセリングというものは新しい領域であり、レジャー・カウンセリングというようなことを担当する方々まで現われてきております。最後の第6が、余暇サービスのプログラムとか指導方法という領域があります。このような分類に基づいて、1984年の大会では48題の発表がありました。御承知のようにアメリカは大変実際の南国ですので、実際の発表をいくつかの枠組みでくくっているのではないかと思っております。

もうひとつ、カナダの事例を紹介させて頂きたいと思っております。カナダでも日本のレクリエーション学会と同じような学会があります。1984年の5月7日から10日まで3日間、第4回カナダ余暇研究会議という会が開催されましたが、ここではもう少し細かく10の分類をとっています。

カナダでもやはり方法論を相当厳密に検討しているようで、第1が、研究とその方法という領域になっていて、ひとつの分科会を構成しています。日本には観光学会というものが別にあります。カナダの場合、レクリエーションとツアーリズム(旅行)とは関連する領域が多いということで、第2に観光旅行に関する分科会が設けられています。第3が心理学および社会心理学的研究、第4が経済とか余暇消費に関しての研究領域、第5が社会学と人類学とを結びつけて社会学および人類学的な研究、第6が生態学、地理学および環境計画に関する研究、第7が経営および環境計画に関する研究、第7が経営および計画、第8が地域社会の開発・発展とレクリエーションという領域、第9が余暇とスポーツといった領域です。カナダでは余暇とスポーツというのはひとつの特別な領域に考えられています。最後の10番目がタイムスタディに関する調査という領域ですが、日本では生活時間調査と言っている領域です。

カナダの学会は第4回ということでアメリカよりも新しい学会であるだけに、カナダはカナダでまたおもしろい考え方に基いて、つまりアメリカと比較するならばより幅の広い考え方に基いて様々な研究発表の枠

組みを考えているようです。

余暇・レクリエーション研究は、まったく新しい研究領域であり、これからどういった学問の領域を発展させ、体系づけしていくかという課題を背負ったいわば発展途上にある研究領域です。また同時に学際領域と申しますか、いろいろな学問領域を含む総合的な研究の領域です。こういったことを考慮するならば、レクリエーション研究はいろいろな枠組みを取り得るわけですので、あまり最初から枠組みを固定するのではなく、柔軟性のある考え方で臨んで頂きたいと思います。また、将来いろいろな新しい研究の発展があり得るわけですので、将来に向かってレクリエーション研究の枠組みをどのような構成にしていって良いのかということに関しては、学会員の皆様方それぞれの知恵を出して頂きたいと思います。

柔軟性があり、なおかつ将来に向かって発展を考えられ得るような枠組みを考えると同時に、様々な学問領域の方々も広く参加できるような学会に発展し得るということ考えたレクリエーション研究の体系化を考えて頂きたいと思います。本学会の発足の経緯もありますが、少なくともこの数年の間を見ましても幅広い学問領域の方々に入っていると言える段階にはありません。しかし、これからの日本の社会の変化、そして余暇時間の増加、レクリエーション行動の多様化等を考えてみますと、やはり、余暇・レクリエーション研究がさらに発展を遂げていかなければならないと思いますので、幅広い領域の方々が学会に参加できる枠組みを考えて頂きたいと思います。

レクリエーション研究の発展ということに触れましたが、この鹿屋体育大学も社会体育およびレクリエーション指導者の養成ということで、まったく新しい試みでおおかつ何もない、いわば0（ゼロ）の状態から出発しているわけです。まだまだ建設途上で学生にとっても教職員にとってもいろいろな面で不満足な点もありますが、この大学をどういうふうに進展させていくかということについては我々教職員そして学生が一丸となってこの新しい大学を作り上げていかなければならないと思います。この鹿屋体育大学ができて本当に良かったと言われるように育つようレクリエーション学会員の方々からも、様々な角度から卒直な御意見、あるいは御支援を賜りたいと存じます。